

## 報 告

発達的气になる子どもの  
保護者へのかかわりの現状と課題

—保育者へのインタビューから—

今村 美幸<sup>1</sup> 室津 史子<sup>2</sup> 疋田 結香<sup>3</sup>  
森 千智<sup>4</sup> 藤原 理恵子<sup>2</sup>

## 抄 録

本研究は、発達障害児の早期発見・早期療育への現状と課題を検討する為に、3名の保育者を対象に子どもの保護者をどのようにとらえてかかわっているかを明らかにすることを目的として質的記述的研究を行った。

保育者は、【さまざまな保護者がいる】、【保護者は気づきにくい】ととらえていた。そのために保育者は、【保護者に子どもの問題へ気づいてもらう】、【保護者へ伝えるタイミングをはかる】、【保護者との信頼関係の構築に努める】、【専門機関への受診・相談をすすめる】ようにかかわっていた。そして、【専門機関との情報交換・連携が欲しい】とも感じていた。

保育者が発達に問題がある子どもに気づいても、保護者からのアプローチがなければ専門機関と連携をとることは困難であるという現状があった。早期発見・早期療育につなげるためには、現在の健診に加えて、保育者、医療従事者、教育者、保健・福祉専門職間の情報交換や協力・連携が求められる。

**Key words:** 発達障害, 保護者支援, 保育者, かかわり

## 1. はじめに

2005年に施行された発達障害者支援法は、障害の早期発見・早期療育、教育・就労などにおける支援システムの確立を目的としており、10年以上が経過した。

障害者白書によると、特別支援学校および小・中学校の特別支援学級への在籍者並びに通級による指導を受けている児童生徒は全総数の約2.9%に当たり、この割合は年々増加している<sup>1)</sup>。また、平成24年に文部科学省が実施した調査<sup>2)</sup>では、通常の学級に在籍している発達障害の可能性のある児童生徒は約6.5%で、その児童生徒の約8割が特別な教育支援が必要と判断されておらず、38.6%がまったく支援を受けていない状況であったという。この結果は、発達障害への理解が広まっているものの、早期発見・支援という点で課題が残されていることを

受稿：2016年12月13日 受理：2017年4月25日

<sup>1</sup> 藍野大学医療保健学部看護学科

〒567-0012 大阪府茨木市東太田4丁目5番4号

<sup>2</sup> 広島都市学園大学健康科学部看護学科

<sup>3</sup> 県立広島病院

<sup>4</sup> 井野口病院

示している。

近年では、発達障害の早期発見のために乳幼児健診（1歳6ヶ月・3歳）や就学時健診において「発達障害スクリーニング」が導入されている。しかし、行動やコミュニケーションの問題が中心である発達障害は、集団生活を経験する幼児期以降でなければ診断は難しく、保育所や幼稚園で集団生活を送る中で保育士によって発見されることが少なくない<sup>3)~5)</sup>。ところが、保護者が子どもの様子を理解していないことや保護者に対する子どもの様子の伝え方に悩むなど、発達的气になる子どもの保護者支援において困難を感じる保育士が多い<sup>6)~8)</sup>という報告もある。

適正な時期での発達障害の早期発見と支援は、発達障害の二次障害予防や養育者のストレス軽減、子育て支援につながる<sup>9)</sup>ため、発見・支援のタイミングが重要になってくる。そこで、著者らは、発達障害児への早期発見と早期支援へつなげるために、子どもの様子を一番身近に把握することができる保育士および幼稚園教諭（以下、保育者とする）が、発達障害と疑われる子どもやその保護者に対して、どのようなかかわりをしているのか、どのような課題があるのかを明らかにしたいと考えた。そして、発達障害児への早期発見・早期支援を行うために、医療従事者としてどのようにかかわることができるのかを検討したので報告する。

## 2. 研究目的

本研究は、発達障害児への早期発見・早期支援に向けて医療従事者としてのかかわりを検討するための第一段階として、保育者が発達的气になる子どもの保護者をどのようにとらえ、かかわっているのかを明らかにし、早期発見・早期支援への現状と課題を検討することを目的とした。

なお、本研究では、発達障害者支援法で規定している発達障害が疑われる子どもを「発達的气になる子ども」とした。

## 3. 方 法

### 3.1 研究対象者

保育所や幼稚園で働いている園長または副園長の

役にある3名（女性：2名、男性：1名）を対象者とした。保育者経験は、女性がそれぞれ44年と35年、男性は25年であった。

### 3.2 データ収集方法

#### 3.2.1 調査期間

2015年7月～2015年8月。

#### 3.2.2 研究方法および分析方法

1) データ収集方法：インタビューガイドを用いて30分程度の半構成的面接を行った。面接は、対象者の都合のよい時間に訪問し、対象者が勤務する園内の一室で面接者と対象者で実施した。

面接中の会話は、メモを取りながらICレコーダーで録音した。なお、録音は対象者の了解を得た上で行った。

2) インタビュー内容：①発達的气になる子どもの保護者に対する思いやかかわり、②保護者とのかかわりの中での困難なことについてインタビューを行った。

3) 分析方法：面接内容を逐語録にしてデータとした。その後、発達的气になる子どもの保護者に対する思いやかかわりに関する部分を抽出してコード化し、類似するものを統合して質的に分析した。主題が明確になるまで統合を繰り返してカテゴリー、サブカテゴリーを抽出した。分析の過程では、研究者間で繰り返し協議・修正するとともに、分析結果を対象者へ確認してもらうことにより、信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### 3.2.3 倫理的配慮

対象者へ、研究の意義、目的、方法、倫理的配慮について口頭と文書で説明を行った。研究協力は自由意志によること、断っても不利益は生じないこと、個人的情報・プライバシー保護の保証、結果の公表方法などを説明し、書面にて同意を得た。

なお、本研究は大学の倫理審査の承認を得ている（広島都市学園大学倫理審査委員会、第2015010号）。

本論文に関連して、開示すべき利益相反（COI）はない。

## 4. 結 果

発達的气になる子どもの保護者への思いやかかわ

りについて分析した結果を、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》，具体的な言葉は「」で示す。

#### 4.1 保育者のとらえる発達の気になる子どもの保護者 (Table 1)

保育者のとらえる発達の気になる子どもの保護者については、【さまざまな保護者がいる】、【保護者は気づきにくい】のカテゴリーが抽出された。

##### 4.1.1 【さまざまな保護者がいる】

【さまざまな保護者がいる】では、《不安を抱えている保護者》、《不安のために自ら行動する保護者》、《気づいている保護者》、《気づいていない保護者》があった。

保育者は、保護者の反応から、《気づいていない保護者》がいる一方で、「“なんか、どうかな。大丈夫かなうちの子は”ってゆう風に思って」と《不安を抱えている保護者》がいると感じていた。また、「3歳児健診では、お母さんも“うちの子なんか、どこか”みたいなのは気づいてますね」という《気づいている保護者》や、「最初から、自分からどんどん相談に行かれるお母さんもおられる」と《不安のた

めに自ら行動する保護者》もいるとも感じていた。

##### 4.1.2 【保護者は気づきにくい】

【保護者は気づきにくい】では、《家庭では問題が現れにくい》、《家庭では保護者は困っていない》があった。

「子どもの思いにお母さんは常に寄り添っているから、あまり家では問題が現れない」と、《家庭では問題が現れにくい》と感じていた。そのため、「集団生活では結構トラブル起こすから、“お母さん、家でいろいろ困っていることない”って聞いたら、“いーえ、全然”って言われた」というように《家庭では保護者は困っていない》とも感じていた。

#### 4.2 保育者による発達の気になる子どもの保護者へのかかわり方 (Table 2)

発達の気になる子どもの保護者へのかかわり方については、【保護者に気づいてもらうためのアプローチ】、【保護者へ伝えるタイミングをはかる】、【保護者との信頼関係の構築に努める】、【専門機関への受診・相談をすすめる】、【専門機関との情報交換・連携が欲しい】のカテゴリーが抽出された。

Table 1 保育者がとらえる発達の気になる子どもの保護者

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な言葉
さまざまな保護者がいる	不安を抱えている保護者	なんかあれば、「ちょっとどうかなって思ってたんです」という風におっしゃる方もおられる
		年長の2学期ぐらいになると、「なんかどうかな。大丈夫かなうちの子は」という風に思われて、動き出されるっていうのがあります
	不安のために自ら行動する保護者	そういう人って結構早く保育園に入るように、働き始めてる
		逆に、自分が最初から“これはこうだ”って思って、自分からどんどんそういうところに相談に行かれるお母さんもおられる
		自分から「うちの子は自閉症ですか。発達障害ですか」と言われる人はあります
	気づいている保護者	3歳児健診では、お母さんも「うちの子なんか、どこか…」みたいなのは気づいてますね 3歳児健診でチェックされる人はお母さんが気付いている。その間にもう現れている。「やっぱり」という感じ
保護者は気づきにくい	気づいていない保護者	全く気にしてない 全然気が付いていない
	家庭では問題が現れにくい	やっぱりこだわりが強い。お母さんは子どもの言うようにする。長靴履きたいといった時に靴をもってきて、靴箱の中に入れて。お母さん困ってないんですよ 子どもの思いにお母さんは常に寄り添っているから、あんまり家では問題が現れない
		お母さんらは事実困っていないから
		私らが「保育士にも嘔みつくんですよ」と言ったら、「家でもよく嘔みます」と。でもそれは親にとっては困ったことではないんですよ
		集団生活では結構トラブル起こすので、「お母さん家で困っていることない？」って担任が聞いたら、「いーえ、全然」と言われたから。「あっそうなんだー」と思って
		家庭では保護者は困っていない

Table 2 保育者による発達の子になる子どもの保護者へのかかわり方

カテゴリー	サブカテゴリー	具体的な言葉
保護者に気づいてもらうためのアプローチ	園での様子を見てもらう	いろんな発表をするときに、子どもの姿を通してお母さんたちにみてもらう
		参観日、運動会、発表会のときに保護者に来てもらって集団生活の中での我が子の姿を見てもらう。普段は朝連れてきて仕事終わって迎えに来てという感じなので、この時の姿で伝える
		参観日の子どもの姿を見て「先生、うちの子だけあんなんですか」と気がつく
	子どもが困っていることを伝える	正直に「この子は集団の中で生活しにくい特性っていうかね、個性を持っているから」と言ったりする
	園や家庭の様子を話し合う	家でいい子にしてるのに園でハチャメチャっていう子は、保護者にもアプローチしていく。難しいことではあるけれど、「お母さん、どうですかね」みたいな感じで
		「お母さん、保育所でこういうことがあったけど、そういう時には家ではどうしてる？」とかいうふうに、たとえばね
		子どもに沿っていたら問題は出てこない。だけど、たとえば、(子どもが)「ラーメン食べたい」って言ったときに、「いや、今日はラーメンはないよ。ごはんと味噌汁よ。魚よ」って言って。その時に、ごはん味噌汁を食べるように言うか、ラーメンを作るかという風に「そういうときには、お母さんどうしてる？」とか聞く
保護者との信頼関係の構築に努める	無理強いしない	「そんなことはない」っていわれるときには、そんなことは言わないです
		してくださいというよりも、「気がのらなかったら大丈夫ですよ、彼も色々な面で伸びてきてるしね、気がのらないんじゃないですよ」って言ったりね
	保護者の思いを受け止める	お母さんに「なんかこの子、ちょっと発達障害があるかもしれないから、相談に行きなさい。」っていても嫌だろうなと思って 必ず、「お母さんどうしてそう思ったの」、「あつ、お母さんはそう思ったのか、なるほど…」って言うようにしている
	日頃から保護者へ声をかける	保護者に伝えるにしても、やっぱりある程度お話して日頃から声をかけるようにしたりする 親御さんが来られた時には話をしたりとか。「この子はこういうの好きだし」とか聞いたら、「先生が何か考えてくれてるんだな」とか、そういう風に思っていたく努力はしています
	適切なことばを考える	不用意に言った言葉でね、「先生それは発達障害ってことですか」と言われてちょっとショックを受けたことがある。私の言い方よくなかったかな、そういうニュアンスをにじませたのかなあと思って考えてね
		「家で困ったことはないの」と聞くのはいい言葉ではないし、適切ではないんだというのはすごく感じた
保護者へ伝えるタイミングをはかる	関係性ができるまでは伝えない	「この先生が言うのなら、ちょっと聞いてみようかな」っていう関係を作るまでは、そんなこと絶対言わないです
		やっぱり、ちょっと時間がある。お母さんとの信頼関係ができないとね。療育センターにつなげるにもね
		誰でもかれでも言いません。やっぱりすごく、信頼関係を持たないと。じゃないとなかなか難しい
	保護者からのアクションを待つ	お母さんからのリアクションがあった時に初めて、「実はね…」と。こっちから声をかけることはなかなか難しい
		お母さんが健診後の紙を見て「先生、行ったほうがいいのかね？」って言うのと、これはチャンスだと思って
		お母さんから聞かれたら「お母さんどうして思ったの？」って聞いて。「うん、やっぱりそれは聞いた方がいいよ。行ってごらん」って言ってから勧めます
		家は親と子ども。「実は、集団生活の中でこういうことがあるんですよ」みたいなのは、お母さんから言ってきたら。そうすると、こっちが気になることを伝えやすい
	健診等の機会を生かす	1歳半健診を機に、やっぱり言いやすい
		1つは保健センターがする健診に必ず行ってもらようようにする
		健診をタイミングとして捉えて、「お母さんで健診でどうって言われた？」って聞く
		保育所の中だけだったら難しいけど、保健センターと連携するっていうか。もうひとつ別のセクションから「こうよ」って言われると、「お母さん、園でも実は…」って言える。なんかマイナスなことは言いにくいじゃないですか

専門機関への受診・相談をすすめる	専門機関への受診・相談をすすめる	「その子が生活しやすい環境を作っていくために、いろんなものを利用していきましょう」という言い方をしたら、わりとわかってくださる
		「保育園での姿はこうだけど、お母さんもう1つ違う角度から療育センターで相談したり見てもらうのも1つの方法よ」というのは言うようにしている
		お母さんを安心させてあげて。それプラス、いわゆる「専門家といわれている人たちを利用する」とって言い方をするんです
専門機関との情報交換・連携が欲しい	専門機関との情報交換が欲しい	専門機関で得られた結果を園にもってきていただいたら、園としても参考にできる
		そういう発達相談の方が時々来てくださるんですね。向こうは、こっちよりもそういうコネクションというか、たくさん持っておられるので、その時に色々お話ししたりとかね
		今、発達障害っていう風に言われてるんだけど、そういう子をたくさん見てる、いわゆる専門家といわれる人たちがいる。たくさんのお子さんを見ておられる方は、どういう風にその子たちに接したらいいかっていうノウハウをたくさん持っておられる。それを100%その通りにするってわけではないけども、ちょっと話して、検査とかもされて、そこで得られた結果を幼稚園に持ってきていただいたら、幼稚園としても参考にしたい。
	専門機関との連携を図りたい	一番見てるのはお母さんなんだし、園の先生なんだし。そこでしっかり関わりながら、そういう専門的な機関を使っていったら、小学校への接続とかがわりとスムーズにいくと思う
		人間関係をね、しっかり保育園とか幼稚所が作っていることが。小学校と繋がっていけるようにしっかり情報交換して、それがいいように回ってくれたら一番

#### 4.2.1 【保護者に気づいてもらうためのアプローチ】

【保護者に気づいてもらうためのアプローチ】では、《園での様子を見てもらう》、《子どもが困っていることを伝える》、《園や家庭の様子を話し合う》があった。

「参観日、運動会、発表会は、保護者に来てもらって集団生活の中での我が子の姿を見てもらう…中略…この時の姿で伝える」など、《園での様子を見てもらう》ことに努めていた。また、「保護者にも結構アプローチしていく。“お母さん、どうですかね”みたいな感じで」と、《園や家庭の様子を話し合う》場を設けようと努めていた。さらに、「正直に“この子は集団の中で生活しにくい特性っていうかね、個性を持っているから”と言ったり」することにより、《子どもが困っていることを伝える》ことにも努めていた。

#### 4.2.2 【保護者との信頼関係の構築に努める】

【保護者との信頼関係の構築に努める】には、《無理強いしない》、《保護者の思いを受け止める》、《日頃から声をかける》、《自分の思いを伝える》、《適切なことばを考える》があった。

「必ず、“お母さんどうしてそう思ったの”とか、“お母さんはそう思ったのか、なるほど…”って」と《保護者の思いを受け止める》ことに努めていた。「“してください”というよりも、“気がのらなかつ

たら大丈夫ですよ”」とするなど、《無理強いしない》よう心がけていた。さらに、「来られた時には“この子はこういうの好きだし”とか、そういう話しをしてみたり。そういう中で“先生、なんか考えてくれてるんだな”とか思っていたかく努力はしています」と、《日頃から声をかける》ように心がけて、信頼関係の構築に努めていた。

また、「私の言い方よくなかったかな、そういうニュアンスをにじましたんかなあ」と、自分自身を振り返り、《適切なことばを考える》ようにもしていた。

#### 4.2.3 【保護者へ伝えるタイミングをはかる】

【保護者へ伝えるタイミングをはかる】には、《関係性ができるまでは伝えない》、《保護者からのアクションを待つ》と《健診等の機会をいかす》があった。

保育者は、「健診の機に、やっぱり言いやすい」と感じており、「健診に必ず行ってもらうようにする。その時をタイミングとして捉えて“お母さん保健所でどう言われた？”って」話す等の《健診等の機会をいかす》ように努めていた。また、「お母さんから言ってきたら、こっちから気になることを伝えやすい」と感じており、《保護者からのアクションを待つ》ていた。しかし、「“この先生が言うのなら、ちょっと聞いてみようかな”っていう関係を作

るまでは、そんなこと絶対言わないです」と、保護者との《関係性ができるまでは伝えない》とも考えていた。

#### 4.2.4 【専門機関への受診・相談をすすめる】

【専門機関への受診・相談をすすめる】には、《専門機関への受診・相談をすすめる》があった。

保育者は、保護者へは「保育所での姿はこうだけど、お母さんもう1つ違う角度から療育センターで相談したり見てもらうのも1つの方法よ」など、《専門機関への受診・相談をすすめる》ようにかかわっていた。

#### 4.2.5 【専門機関との情報交換・連携が欲しい】

「専門機関で得られた結果を園にもってきていただいたら、園としても参考にできる」とか、「ちょっと話をして、検査とかもされて、そこで得られた結果を幼稚園にもってきていただいたら、幼稚園としても参考にしたい」と、《専門機関との情報交換が欲しい》や、「保育所とか幼稚園が作っていることが小学校と繋がっていけるようにしっかりこう情報交換して、それがいいように回ってくれたら一番」と、《専門機関との連携を図りたい》と思っていた。

## 5. 考 察

### 5.1 発達気になる子どもの保護者への思いとかかわり

保育者は、【保護者に気づいてもらうためのアプローチ】として《園での様子を見てもらう》、《子どもが困っていることを伝える》、《園や家庭の様子を話し合う》というかかわりや、《保護者の思いを受け止める》ようにかかわっていた。発達気になる子どもの特性は多様である。そのため、保護者の気づきと診断までにタイム・ラグがあり、保護者は子どもの行動に気づきながらも障害とは認識せず漠然と不安を抱えている<sup>10, 11)</sup>。したがって、子どもの特性に何らかの不安を抱えている保護者にとって、このような保育者のかかわりは、その不安を表出し共有できる機会となる。さらに、不安の表出と共有によって保護者自身が専門機関への相談や受診へとつながることから、子どもの早期発見・早期支援に向けても重要なかかわりとなっていた。

発達や行動上の問題が心配な子どもについては、

保育者が保護者へ受診の勧めを行うという体制をとる自治体が多いという報告<sup>12)</sup>がある。本研究でも、発達気になる子どもに気づいた保育者は、保護者の理解と協力を得て専門機関での診察を勧めていた。その一方で保育者は、【保護者は気づきにくい】とも感じていた。子どもの特性に《気づいていない保護者》に対して保育者は、【保護者へ伝えるタイミングをはかり】、【保護者に気づいてもらうためのアプローチ】を行っていた。保育者が、保護者へ反発や誤解のないように子どものことを伝えられるかどうかは親との間の信頼関係が影響する<sup>13)</sup>。また、信頼関係を構築できていたとしても「気になる」ことの伝え方次第で保育者と保護者との関係が壊れてしまう<sup>7)</sup>こともある。特に、《気づいていない保護者》に伝える場合はその可能性が高くなるとされる。そのため、保育者は保護者に直接伝えて受診を勧めたいと思いつつも、保護者が子どもの特性に気づけるか否かによってはそれが困難な場合もあることを示すものである。

以上のことから、保育園や幼稚園は発達気になる子どもの早期発見・支援施設として重要な施設である。しかし、保育者は保護者との信頼関係を重要視しているために、自らの思いを保護者へ伝えることへの困難さを抱えていることがうかがえた。

### 5.2 早期発見・早期支援へ向けての課題

発達気になる子どもへの早期発見は、子どもの早期支援へつながり二次障害予防にも重要である。また、早期発見・早期診断が親の早期障害受容や療育への積極的な取り組みに結びつくという報告<sup>14)</sup>もあり、子どもと保護者への支援として早期発見は重要な位置を占めている。ところが、早期発見が重要な位置を占めているにもかかわらず、子どもの特性にいち早く気づいた保育者が保護者へ伝えることへの困難さを抱えている状況では、支援が滞る可能性がある。

保育者は、保護者や子どもが専門機関と関わる最も身近な機会である《健診等の機会をいかし》、【保護者へ伝えるタイミングをはかって】いた。ところが、乳幼児健診では明らかな言葉の遅れや行動の問題から発達障害を疑うことはできても、社会性の問

題については子どもを取り巻く集団の社会性が発達していないとわからないという問題がある<sup>15)</sup>。さらに、3歳児健診後に顕在化した発達の問題を就学前に「気づき」を促し、就学に向けた準備へとつなげることを目的とした5歳児健診を実施している地方自治体が近年増加しているが、平成24年度に調査した実施率は未だ全国で1割弱である<sup>16)</sup>ことから健診による発見には限界がある。このことより、保育者が保護者に伝えるために健診の機会をいかにすだけでは不十分であるといえる。

平成28年に発達障害者支援法の一部が改正され、「社会的障壁」除去に向けての支援や、乳幼児期から高齢期まで切れ目なく教育・福祉・医療・労働などが連携して支援をすることなどが追加された<sup>17)</sup>。発達障害を支援する専門職の育成や連携施設職員への研修会などが実施され、徐々に専門職が増加し発達障害児への理解は広がっている。しかし、保育者は、「専門機関との情報交換が欲しい」、「専門機関との連携を図りたい」とも考えていた。さらに、【専門機関への受診・相談をすすめる】というかわりの方で、「無理強いしない」とも考えていた。乳幼児期の保護者は、発達の気になる子どもの特徴を「育てにくさ」として気づいているが、障害の初期症状として気づいているわけではない。そのため、「障害」という言葉に過敏になり反発される可能性が高いともいわれている<sup>18)</sup>。このことより、子どもの特性に気づいた保育者が、保護者へ専門機関への受診・相談を勧めたとしても、保護者の意思なくして専門機関につなげることはできないという状況から、保護者によっては対応が停滞することも考えられる。これは、専門機関へ受診・相談へと進めるには保護者の意思が重要視されるからであり、それゆえに各施設・各職種が各々の場所がかかわることの限界が考えられる。したがって、子どもにかかわる各施設・各職種が感じている問題や課題、そして情報を共有・連携し、それを反映させられるようなシステム構築が、発達の気になる子どもの早期発見・早期支援へとつながっていくのではないだろうか。

以上のことから、発達の気になる子どもの早期発見・早期支援へとつなげるためには、健診に加えて保育者、医療従事者、教育者、保健・福祉専門職間

の定期的かつ円滑な情報交換が必要であり、各施設および職種間のさらなる協力・連携が求められる。

### 5.3 本研究の限界と課題

本研究は、園長または副園長の役にある経験豊富な3名を対象に行った。しかし、保育者としての経験年数や立場の違いによって、感じることや気づくこと、かかわり方は異なるであろうことから、本研究は、経験豊富で管理者という立場にある保育者のとらえ方やかかわり方に限定される。また、対象者数も3名と少ない。

したがって、発達障害児への早期発見・早期支援に向けて医療従事者としての関わりを検討するためには、今後、さらに対象者数を増やすとともに、立場の異なる保育者を対象にした分析も必要である。

## 6. 結 論

1. 保育者は、発達の気になる子どもの保護者を、【さまざまな保護者がいる】し、【保護者は気づきにくい】ととらえていた。
2. 保育者のかかわりには、【保護者に子どもの問題へ気づいてもらう】、【保護者へ伝えるタイミングをはかる】、【保護者との信頼関係の構築に努める】、【専門機関への受診・相談をすすめる】があった。
3. 保育者は、【専門機関との情報交換・連携が欲しい】と感じており、保育者、医療従事者、教育者、保健・福祉専門職間等との協力・連携が求められる。
4. 本研究は対象の経験年数や役割が限られているため、対象を拡大し一般化に向けたさらなる分析が必要である。

## 文 献

- 1) 内閣府. 平成25年版障害者白書, 第3章社会参加へ向けた自立の基盤づくり. [http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/h2\\_03\\_01\\_01.html](http://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h25hakusho/zenbun/h2_03_01_01.html). (2016.9.27).
- 2) 文部科学省. 特別支援教育について. 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について. 2012. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/material/1328729.htm). (2016.9.27).

- 3) 飯田順三. 高機能自閉症とアスペルガー症候群における診断と告知. 発達障害研究 2004; 26 (3): 164-173.
- 4) 高橋脩. 地域療育システムにおける自閉症の診断と説明. 発達障害研究 2004; 26 (3): 153-163.
- 5) 津田芳見, 橋本俊顕, 高原光恵. 集団生活に適応が困難な3歳児に関する保育士への質問紙調査-地域保健と保育の連携による発達障害スクリーニングの予備的調査-. 小児保健研究 2009; 68 (6): 669-674.
- 6) 木曾陽子. 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態. 社会問題研究 2014; 63: 69-82.
- 7) 斎藤愛子, 中津郁子, 栗飯原良造. 保育所における「気になる」子どもの保護者支援-保育者への質問紙調査より-. 小児保健研究 2008; 67 (6): 861-866.
- 8) 池田友美, 郷間英世, 川崎友絵, 山崎千裕, 武藤洋子, 尾川瑞季, 永井利三郎, 牛尾禮子. 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究 2007; 66 (6): 815-820.
- 9) 譜久山民子, 宮城雅也, 上原真理子, 前田和子, 佐久間博美, 砂川恵正 他. 発達障害を持つこどもの早期発見・早期支援に関する保育士の課題. 沖縄の小児保健 2012; 39: 49-52.
- 10) 嶺崎景子, 伊藤良子. 広汎性発達障害の子どもをもつ親の感情体験過程に関する研究. 東京学芸大学紀要総合教育科学系 2006; 57: 515-524.
- 11) 東谷敏子, 林隆, 木戸久美子. 発達障害児を持つ保護者のわが子の発達に対する認識についての検討. 小児保健研究 2010; 69 (1): 38-46.
- 12) 山下裕史郎. 軽度発達障害児への気づきと対応システム ちょっと気になる子たちの幸せを願って保健所における軽度発達障害児の早期発見・対応システム. 小児保健研究 2007; 66 (2): 198-200.
- 13) 東山弘子. 幼児保育とカウンセリング. 東京: ミネルヴァ書房; 1995.
- 14) 二木康之, 山本由紀. 障害の告知と受容-地域自閉症児親の会アンケート調査から-. 脳と発達 2002; 34 (4): 336-342.
- 15) 五十嵐隆. 発達障害の理解と対応. 東京: 中山書店; 2008. p13.
- 16) 一般社団法人日本臨床心理士会福祉領域委員会発達障害支援専門部会. 乳幼児健診における発達障害に関する市町村調査報告書(平成26年) [www.jsccp.jp/suggestion/sug/pdf/kenshinhoukokul40702.pdf](http://www.jsccp.jp/suggestion/sug/pdf/kenshinhoukokul40702.pdf). (2016.11.5).
- 17) 文部科学省. 発達障害者支援法の一部を改正する法律の施行について, [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/main/1377400.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1377400.htm). (2016.10.29).
- 18) 林隆. 乳幼児健診における発達障害への気づきと連携. 母子保健情報 2011; 63: 24-28.

# **The current situation and problems of involvement with parents of children suspected of having developmental problems : perspectives of childcare workers**

Miyuki IMAMURA<sup>1</sup>    Fumiko MUROTSU<sup>2</sup>    Yuka HIKITA<sup>3</sup>  
Chisato MORI<sup>4</sup>    Rieko FUJIWARA<sup>2</sup>

## **Abstract**

We conducted a qualitative and descriptive study on three childcare workers' perspectives on the present situation and problems in early detection and treatment of children who are suspected of having developmental problems, to clarify their perceptions and involvement with parents of such children.

The childcare workers felt that parents' characteristics varied greatly and that it was difficult for parents to detect their children's developmental problems. Therefore, they made efforts to remind parents of their children's problems, looked for the right time to tell them about such problems, built a trusting relationship with parents, and advised them to seek consultation from specialized medical institutions. The childcare workers also felt that they needed to exchange information and collaborate with specialized medical institutions.

In the current situation, when childcare workers detect a developmental problem in a child, it is difficult for them to collaborate with a specialized medical institution unless there is a request from the child's parent. In order to promote early detection and treatment, information exchange, cooperation and collaboration between childcare workers, medical professionals, educators, and health and welfare professionals are required in addition to the medical examinations that are conducted currently.

**Key words:** developmental disorders, parental support, childcare worker, involvement

---

<sup>1</sup> Department of Nursing, Faculty of Healthcare Science, Aino University  
4-5-4 Higashi-Ohda, Ibaraki City, Osaka 567-0012, Japan

<sup>2</sup> Department of Nursing, Faculty of Health Science, Hiroshima Cosmopolitan University

<sup>3</sup> Hiroshima Prefectural Hospital

<sup>4</sup> Inokuchi Hospital